

第10期環境市民会議（第14回）会議要録

日 時：令和元年11月27日（水）18時30分～20時20分

場 所：武蔵野市役所西棟1階111会議室

出席者：委員8名、事務局6名

（委員：大江委員長、鈴木副委員長、朝日委員、新井委員、小川委員、千葉委員、白田委員、服部委員、木村委員）

内 容：① 緑の量と大気中の二酸化炭素濃度について

② 「武蔵野市環境基本計画アンケート調査」の集計結果について

③ 第10期市民会議の成果の内容について

④ 第10期環境市民会議の総括

① 緑の量と大気中の二酸化炭素濃度について

事務局：資料3「気象と健康」をご覧いただきたい。前回の会議で、「緑を増やせば大気中の二酸化炭素濃度が下がるのか」という質問があったが、濃度が下がるという回答の根拠となるデータを委員から提供いただいたので、資料の補足説明をお願いしたい。

委員：2004年に日本衛生学会の学術総会で講演した際、一般財団法人気象業務支援センターから岩手県綾里の月別の二酸化炭素濃度のデータをもらった。このデータから分かることは、葉が茂っている夏季（6月～9月）には盛んに光合成が行われ、大気中の二酸化炭素が吸収されることによって濃度が下がるということである。月別で比較すると、最大で12ppmの差がある。また現在は、このデータよりもさらに二酸化炭素濃度が上昇している可能性もある。

委員長：岩手県綾里はどのあたりか。

委員：海沿いの街である。

② 「武蔵野市環境基本計画アンケート調査」の集計結果について

事務局：資料1「環境に関する市民・事業所アンケート結果報告書（速報）」について説明する。このアンケートは次期環境基本計画策定にあたって、現環境基本計画を評価する材料として実施した。今回は単純集計であって、各設問のクロス集計は今後行っていく予定である。（以降、報告書に関する結果説明は省略）

委員長：量のある報告書が提出された。興味深いところもある。質問はあるか。

委員：近年は、企業がSDGsに取り組むことが重要と言われているが、あわせてESG（環境・

社会・ガバナンス)に取り組むことも重要と言われている。市民アンケートにはSDGsの質問があるが、事業所アンケートにはSDGsの質問がなく、ESGの質問もない。武蔵野市では、どのように考えているか。

委員：大きい企業では、社会的責任としてSDGsやESGに取り組む流れができつつあるが、市内では中小企業が多いため、SDGsやESGの取り組みが難しい現状と思われる。そういう背景もあり、武蔵野市として事業所に対する取り組みはあまり行っていない。また、今回の事業所アンケートは配布数が200件と少ないため、調査結果は参考程度に捉えている。ただし調査結果からは課題も見えてきたため、次期環境市民会議でも検討していきたいと考えている。

委員長：調査結果の中で経年比較を行っているのは、過去のアンケートで同じ設問が設定されているものだけか。

事務局：そのとおりである。

委員：市民は武蔵野市の「緑」が大事と考えているようだ。また、今年の台風の影響もあり、地球温暖化対策の必要性が高まったと考えている。不要な照明をこまめに消したり、ごみを減量したりと簡単にできることは多くの人に取り組んでいる一方で、省エネ・創エネなどお金のかかることにはあまり取り組めていないようである。来年度にオープンするエコプラザ（仮称）を活用して、環境情報を提供し環境配慮行動を促すことが必要だと感じた。

副委員長：次期環境基本計画に繋げていくにあたり、この調査結果をどのように分析するかが重要である。事業所アンケートは配布数も回収数も少なく、この結果から得られる情報は限られているため、拡大解釈をして対応するようなことはしないほうがよいと考える。一方、市民アンケートの回収率は30%を超えており、有意なデータである。この結果から得られる情報は幅広いので、設問ごとに分析していく必要がある。特に生活環境については、市民の関心も高いと考えられるため、きめ細かく分析する必要がある。なお、問1の「優先的に対策していくべき環境の課題」の選択肢で、「地球温暖化（ヒートアイランド含む）」とあるが、地球温暖化とヒートアイランドは別の現象なので、選択肢を分けたほうがよかったと考える。

委員：環境問題は、たくさんのステークホルダーが参加しなければ解決できない広域的な問題である。このため、近隣自治体と連携することが重要と考えている。例えば、世田谷区は、近隣自治体と連携しているようである。また先日、目黒区のエコプラザの方から、武蔵野市のエコプラザ（仮称）は良いものになりそうだという話を聞いた。エコプラザ（仮称）には期待している。

委員長：調査結果を分析すれば様々なことが分かると考えている。今回の調査は、過去の調査よりも回答者の属性の設問を細かく設定しているため、属性ごとの特徴なども細かく分析することができる。次期環境基本計画に反映すべき示唆やアイデアも出てくるのではないかと。事業所アンケートについては、最初はグリーンパートナーとして登録している事業所に配布するという案であったが、無作為抽出に変更することになり、回収数が39件と少なくなった。市内には8,000事業所あるといわれているが、この結果をたたき台とし、次回の調査時に工夫するとよいのではないかと。

③ 第10期市民会議の成果の内容について

事務局：続いて、資料2「第10期武蔵野市環境市民会議の報告書」については、前回いただいた意見を加筆修正して、最終版を作成した。(以降、内容の説明は省略)

委員長：事務局でまとめてもらった成果は、どこへどのような形で報告するのか。

事務局：第11期の委員のみなさまに、第10期の経緯としてお話することを考えている。

委員長：提言としてはまとめないが、このような議論があったということを申し送りするということか。

事務局：そのとおりである。

委員：第10期市民会議は、いろいろなテーマについて勉強して議論したことが重要だと考えている。これらの蓄積が第11期の材料になるため、事務局で成果をとりまとめたという経緯である。また、テーマごとにいろいろな課題が見えてきたため、第11期ではこれらの課題に対して、どのようなことをやっていくのかを検討してもらおうとよいと考えている。

副委員長：第12回の会議資料で、世界・国・都の動向に関する資料が配布されたが、とても大事なものである。それぞれの上位計画がどのように体系づけられるのかを整理するとよい。それによって、基礎自治体レベルでどのように扱ったらよいのか、ヒエラルキーのような組み立てを整理するとよい。東京都も環境基本計画の見直しを行うようなので早めに動向を察知し、その上で武蔵野市としてどのような施策体系を立てるのかを検討する必要があると考える。

委員長：これから環境の変動が大きくなり、重視する施策も変わっていくため、世界・国・都の動向を見ながら取り組んでいく必要があると考えている。検討いただきたい。

委員長：アンケート調査結果については、分析したものが次期市民会議に渡されるのか。

事務局：引き続き分析を進め、結果は次期環境市民会議に報告する。

委員長：今後事務局でまとめたアンケート調査結果を、ぜひ第10期の委員にもお伝えいただきたい。

副委員長：統計学をやっていたため、アンケート調査結果の分析に協力してもよい。

事務局：ぜひお願いしたい。

④ 第10期環境市民会議の総括

事務局：委員のみなさまに一言ずつお話をいただきたい。

委員：先ほど議論があったように、市民アンケートの問1の選択肢で、地球温暖化とヒートアイランドを分けておいたほうがよかったという点は、今後指摘されるかもしれない。世田谷区と目黒区でも審議会委員を務めているが、それぞれ内容も進め方も違うと感じた。特に、武蔵野市では勉強させていただいた。

委員：市民アンケートでは、すべての小中学校に太陽光発電設備を導入していることについて、75%の人が知らないという結果であった。今後学校改修が始まるが、それが環境に対する考えを変えるよいきっかけになると考えている。

委員：3回目の会議から参加した。当初は、2か月に1回の勉強会のような進め方をしてきた。この成果を第11期に活用したい。またこの会議に参加しながら、武蔵野市で何ができるのかと答え探しをしていた。その中で、市民のみなさんに情報を出したり、学びの場を用意したり、環境配慮行動につなげていく仕組みを作っていくことが、基礎自治体の責務なのかと考えるようになってきた。今後も議論していきたい。

委員：武蔵野市の環境に対する姿勢は積極的だと感じていた。環境には幅広い分野がある。企業の立場からすると、どのように活動しなくてはいけないのか、この会議の成果をどのように反映できるのかを考えると難しいと感じた。エコプラザ（仮称）にも参加し、企業としてどのようなことができるのか、話し合える機会があればよいと考えている。

委員：当初は、緑や生き物という視点から環境を見ていた。その後、ごみや地球温暖化の面で自分として何ができるのかと考えるようになった。食品ロスを減らすためには、みんなが小さい冷蔵庫を買えばよいと考えている。物をたくさん買いすぎないように努力していきたい。また前回、話があったワットアワーメーターを使った講座は興味がある。

委員：小学4年生を対象に、家電製品から二酸化炭素の排出量について考える講座を行ったが、親の食いつきがよかった。2050年に地球はどうなるかというスライドを作って説明した。武蔵野市でもそのような教材を使った講座を行っているという話を聞いた。

委員：新人研修で、「2050年の天気予報」の動画を流してから、武蔵野市の取り組みの説明をしているが、インパクトがあり食いつきがよい。自分たちの代で起こるかもしれないという意識が変わる。

委員：気象予報士に、二酸化炭素は水に溶けるという実験をしてもらったことがある。海があるからまだよいが、飽和すると大変なことになるという話を思い出した。

委員：6年前に武蔵野市民になった。その後、水の学校に参加するようになり、現在に至っている。残念なのは、水の学校の参加者に若い人が少ないことである。東京都・神奈川県・埼玉県・長野県の環境影響評価審議会の委員、東京都の公害審査会の委員を務めた。その中で、武蔵野市はとてもコンパクトだと感じた。コンパクトであることを生かして、いろいろなことができると感じた。

委員：3回しか出席していないため総括は難しいが、3回出席した中で疑問に思ったことがある。第10期の前半の資料をみるとグローバルな問題を多く取り扱っているが、今回のアンケート調査ではまちかどの問題を多く取り扱っている。どのような意図で、設問を設定したのかが分からなかった。武蔵野市でもまだ模索中とのことであるが、武蔵野市がやること、できることは限られているため、それを主体的に考えた方が、何かと見えてくるのではないかと感じた。

副委員長：同じような意見である。先ほど、世界・国・東京都との関係を把握したほうがよいと話した。武蔵野市では地域環境での課題を抽出し、具体的に改善していくことが大事である。また、世界や国を変えるような人材を育てることが大事であり、子どもたちの考え方に影響を与えるような力も必要だと考えている。グローバルな環境問題は、ショッキングなほど関心を与えやすいという点があるため、インパクトのある情報が出やすいが、一方で疑ってかかることも大事である。世界や国の計画をそのまま受け止めるということではなく、どのように科学的に考えるか、その力が大事だと考えている。気候変動の捉え方も、一方的な見解を取り込みすぎている可能性もあるため、なるべくフラットに情報を取り込むとよいと考えている。

委員長：環境市民会議は、第9期、第10期に関わらせてもらった。その前は、亜細亜大学にいたことで、ごみ対策の関係でも武蔵野市に関わらせてもらった。環境は、扱うテーマの範囲が広く、それぞれが大きい。シンク・グローバリー、アクト・ローカリー（地球規模で考え、足元から行動せよ）という考え方が大事である。行政は、市民にサービスを提供する立場であり、そこに橋渡しができる環境市民会議、行政や議会への提言

ができる環境市民会議ということ意識して進めてきた。意識やレベルの高い方が多く、私自身勉強になった。第10期の成果を今後引き継いでいただきたい。

委員：私が所属するNPO法人で、危険生物ハンドブックを作成した。2年前の初版があるため、よければ全員にお渡ししたい。2版ではヒアリなどを追加している。

委員：ヒアリは、地球温暖化適応策としても考えていく必要がある。温暖化しているから、日本でも冬を越して生息できるようになった。これも課題の一つだ。

以上